

# 太陽族

真夏を予感させるこの季節。湘南の海では、サーファー達が波と戯れている。昭和31年、石原慎太郎の小説「太陽の季節」は、「太陽族」と呼ばれる青年達を生んだ。当時この小説と映画は、未成年者に悪影響を与えると、大人達から非難を浴びた。あれから二十数年、この小説は今美しい恋愛小説として読まれている。

昭和26年・元祖太陽族

- “太陽族”の健康診断〔週刊東京〕昭31・5・5
- 太陽族まかり通る 映画界の慎太郎ブーム〔週刊東京〕昭31・5・27
- 「もういい、慎太郎」“太陽族映画”をたたく〔週刊朝日〕昭31・7・15
- ルポ 逗子・葉山海岸 湘南の白砂を荒す“太陽族”〔週刊読売〕昭31・8・5
- “太陽族”山へ登る 上高地・軽井沢・箱根の現地ルポ〔週刊東京〕昭31・8・11
- ルポルタージュ 太陽族の海〔週刊朝日〕昭31・8・12
- テントの中の“裏千家”太陽族コース志賀高原木戸池キャンプ村〔週刊読売〕昭31・8・19
- 太陽族の制服拝見〔サンデー毎日〕昭31・8・26
- “太陽族”の実態と批判 青春の破壊(板垣直子)(婦人公論)昭31・9
- 現代は「ドライ」時代か? —一つの太陽族分析—〔週刊朝日〕昭31・9・23
- 親子二代の太陽族(川口松太郎)〔文藝春秋〕昭31・10
- 私の眼に映る太陽族の人達(菊寿男)〔地上天国〕昭31・11
- 世界語になった“太陽族”〔週刊新潮〕昭31・12・17
- 「太陽族」の正体(扇谷正造)〔新政経〕昭32・1
- 太陽族かたぎとアリの孔(高木惣吉)〔特集知性〕昭32・1
- <族>を演出した男の報告書(内田栄一)〔週刊言論〕昭42・7・5

- 「太陽の季節」から20年めの青春論を聞く／石原裕次郎・41才〔女性セブン〕昭51・7・21
- 「太陽の季節」古き恋の物語(塩見鮮一郎)〔創〕昭54・9
- 写真で見る女の歴史 太陽族から竹の子族まで〔女性自身〕昭55・8・7
- 太陽族の元祖たち、彼らが不良だったなんてとても思えない(及川哲也)〔ブルーラス〕昭56・8・1
- 元太陽族、いまは「安全」を売る男(飯田亮、イーデス・ハンソン)〔週刊文春〕昭56・9・17
- 湘南海岸株式会社 太陽族 むかし、むかし湘南は…〔オールライト〕昭58・7

## 話題人間の履歴書

### 植村直己

▽「出発するとすぐ、帰ることはかり考えるんですよ。毎日先に進みながら、いかにして先に進むかばかり考えてるんです。それが一定のところまで進むともう引き返しのきかない状況までくるわけです。そこで初めて、先に進むことだけしか考えなくなるんですけれど。」(『週刊文春』昭54・1・4)

エベレストを含む世界5大陸の最高峰登山、アマゾンの筏下り、北極圏1万2千km大橋走破など、枚挙にいとまがない程の冒険をものにした「アニマル・ウエムラ」にしては、謙虚すぎる(？)と思えるほど控え目な発言ではあります。▽植村直己氏の発言を拾ってみますと、既に多くの方が指摘しているとおりに、自らの行為を飾ったり、それに酔ったりしている箇所が全くといいほど見あたらなことに気づきます。植村氏の発言からは、数々の賛辞の渦中にあり、探険家という社会的認知をうけた上で尚、自らを「社会人失格者」と呼ぶ、きわめてナイーブな人間像が浮かび上がってくるだけです。▽徹底した個人主義を標榜し、その偉業のほとんどは単独で成し遂げたことで知られる植村氏も「いろいろな面で周囲の援助を受けたり、お金をもらったりしてやっていますでしょう。もし失敗すれば、みんなに迷惑かけるんだ、叱られるんだというような感じが先走っちゃって、本来のものが何かないような気がする。」(『週刊文春』昭54・1・4)というジレンマを抱えていたようで、この点は、今年2月に植村氏がマッキンリーで消息を断った時に「植村直己氏を遭難に追い込んだ『カネと野心』の舞台裏」(『週刊現代』昭59・3・10)等で改めて指摘されました。

▽昭和16年兵庫県生まれ、明大農学部卒業後、各地を探険し、50年歴程賞、54年バラー賞をうけるが、59年マッキンリー下降中に遭難し絶望視されていた。同年国民栄誉賞受賞。(Y・A)